

Title	Bodhicaryāvatāraの基本性格：一人称の意味するもの
Author(s)	梶原, 三恵子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 25 P.25-P.38
Issue Date	1991-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4449
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Bodhicaryāvatāra の基本性格

— 一人称の意味するもの —

梶原三恵子

序

Bodhicaryāvatāra (『入菩提行』, 以下 BCA と略す) は, 8世紀初頭のインド仏教中観派の学僧であるシャーンティデーヴァ (Śāntideva) の著作とされている。整ったサンスクリット語の韻文で書かれた約900偈¹⁾, 全10章からなる作品である。この作品はすでに19世紀の末から諸学者の関心を集め, 宗教体験を端麗な詩にうたった芸術的作品として評価されてきた²⁾。現代語への翻訳も何度も行われている。しかし, BCA が何のために著された, どういう性格の作品であるかについては, これまでまとまった研究は行われていない。研究の対象として, 教理的議論が展開されている第9章が主に注目されてきたからである。そこで本稿は, テキスト全体の構成と, 従来見過ごされてきた叙述の特徴から, BCA そのものの基本性格を明らかにすることを目的とする。

(1) BCAの構成

BCA は前述のとおり全10章からなっている³⁾。テキストには各章末に次のような章名が付されている。

第1章: Bodhicittānuśamsa

「菩提心の讃嘆」

第2章：Pāpadeśanā	「罪惡の懺悔」
第3章：Bodhicittaparigraha	「菩提心の摂受」
第4章：Bodhicittāpramāda	「菩提心の不放逸」
第5章：Samprajanyarakṣaṇa	「正知の守護」
第6章：Kṣāntipāramitā	「忍耐の完成」
第7章：Vīryapāramitā	「精進の完成」
第8章：Dhyānapāramitā	「禅定の完成」
第9章：Prajñāpāramitā	「智慧の完成」
第10章：Pariṇāmanā	「回向」

この作品の構成は、内容のうえから大きく三つに分けて考えることができる。まず、前半の第1章から第4章までは、菩提を求める心 (bodhicitta 菩提心) を起こすこと (発菩提心) と、菩提にむけて努力する決意とを述べている。次に、後半の第5章から第9章は、菩提に到達するための菩薩の学道 (śikṣā) を述べている。そこでは学道が、大乘仏教の修行体系のひとつである六波羅蜜 (pāramitā 完成) (施, 戒, 忍, 精進, 禅定, 智慧) にそって叙述されている。このことは、第6章から第9章までについては章名に明示されている。第5章については、内容のうえから、また漢訳がこの章の題を「護戒品」とすることから、戒波羅蜜を述べていると考えることができる⁴⁾。そして最後の第10章では、あらゆる存在への回向と、結びの言葉を述べている。つまり前半部は菩提行に入ろうという決意を、後半部はその菩提行の内容を、そして最終章は結びを述べているといえる⁵⁾。

(2) BCAと発心儀礼

BCAの大きな特色の一つは、第2章から第3章にかけて、供養などの儀礼行為が並んで現れていることである。注釈者ブラジュニャーカラマテ

ィ (Prajñākaramati, 11世紀頃) の分類に従えば、礼拝 (vandana), 供養 (pūjana), 帰依 (śaraṇagamana), 罪の懺悔 (pāpadeśanā), 福德の随喜 (puṇyānumodana), 仏の勸請 (buddhādhyeṣāṇā), 懇請 (yācanā), 菩提の回向 (bodhipariṇāmanā) という8つの儀礼行為が続けて述べられている (BCAP p. 44³⁻⁴)。これらの行為は、大乘の經典や論書 (特に中観系統) にしばしば一続きのものとしてひとまとまりで現れるものである。行為の種類・数・順序は必ずしも一定していないが、七という数でまとめられる傾向がある (「七種無上供養」など)⁹⁾。BCA はこれらの一連の行為を網羅して、その各々に関して詳しい叙述を行っている点で、この儀礼行為の整備された形を伝えているものといえる⁷⁾。そのことは、BCA のこの部分が、後世の文献にこれらの行為の典拠としてよく引用されていることからもうかがえる⁸⁾。

これらの儀礼行為の中でも、供養は特に詳しく、かつ具体的に記述されている。供養の記述は一連の儀礼行為の記述の4分の1を占めている。ここでは行われる行為、用いられる供物などが詳しく具体的に述べられている。ところでここに述べられている供養は、いちいちを実際に行うのではなく、対象と供物を思い浮かべて心の中で行う供養である。このことは、次の偈に明瞭に述べられている。

BCA 2. 6ab ādāya buddhyā munipuṅgavebhyo

niryātayāmy eṣa saputrakebhyaḥ /

〔以上に述べた花, 果実その他を〕意識 (buddhi-) によって手にとって、牡牛のごとき聖者たち (= 諸仏) と子供たち (= 諸菩薩) に、このわたしは捧げる。

このような供養は「心的供養」(mānasa-pūjā) といわれる。心的供養も特定の時と場所において、一定の形式をもって行われる儀礼行為の一つ

である⁹⁾。この心による供養が、一続きの行為の最初のものとしてここで規定されている。

この一連の儀礼行為によって行われているのが、菩提心を起こす発菩提心の儀礼であることは、最初の行為である供養が「そこで、[菩提]心という宝をつかみとるために、いまここでわたしは如来たちの供養を正しく行う (tac cittaratnagrahaṇāya samyak pūjāṃ karomy eṣa tathāgatānām)」(2. 1ab) とされ、これらの行為のすぐあとで「[かつて諸仏が菩提心をつかみとったように] そのように、世界の人々のためになるものとして、いまここでわたしは菩提心を起こす (tadvad utpādayāmy eṣa bodhicittaṃ jagaddhite)」(3. 23ab) と発菩提心が宣言されていることによってわかる。つまり、BCA においては、供養に始まる一連の行為が、まさに発菩提心の儀礼をかたちづくっているといえる。このように、文中に具体的な儀礼行為を含んでいることは、この作品の大きな特色である。

(3) 二種の菩提心

ところで菩提心に関して、BCA は次の二種の区別を認めている。

BCA 1. 15 tad bodhicittaṃ dvividhaṃ vijñātavyaṃ samāsataḥ/
bodhipraṇidhicittaṃ ca bodhiprasthānam eva ca//

要約すれば、この菩提心は二種類あると知られるべきである。[すなわち] 菩提を誓願する心と、菩提に前進する[心]とである。

この二種の菩提心は、「たとえば行くことを望む人と[実際に]行く人との区別が認められるように (gantukāmasya gantuś ca yathā bhedaḥ pratiyate)」(1. 16ab) と区別されている。それぞれの菩提心の果報も「菩提を誓願する心の果報は、輪廻の中のことはあるが、大きい。しか

し〔それは、菩提に〕前進する心のような、不断の福德をもつものではない (bodhipraṇidhicittasya saṃsāre 'pi phalaṃ mahat / na tv avicchinna puṇyatvaṃ yathā prasthānacetasaḥ //) (1. 17) と区別されている¹⁰⁾。この二種の菩提心の区別は、BCA 全体の構成にも対応している。前述したように、この作品は前半部と後半部に分かれている。前半部の第2章から第3章 (3. 21 まで) にかけて行われている発菩提心は、菩提を誓願している段階である。それだけで満足するのではなく菩提に前進しなければならないと、自らを鼓舞し、その決意を表明しているのが第3章 (3.22 から) と第4章である。そこでは、「〔かつて諸仏が菩提心をつかみとったように〕 そのように、世界の人々のためになるものとして、いまここでわたしは菩提心を起こす (原文は前掲) (3. 23ab) という発菩提心の宣言に続いて、「以上のように決意して、説かれたとおりの学道を実践するためにわたしは努力する (evam viniścītya karomi yatnaṃ yathoktaśīkṣāpratipattihetoḥ) (4. 48ab) という菩提行への決意の表明がなされている。そして続く後半部の第5章からは菩薩の学道に入る。つまり、二種の菩提心の区別から見れば、「菩提を誓願する」一つめの菩提心は、第2章から第3章の発菩提心の段階に相当し、「菩提に前進する」二つめの菩提心は、第5章以降に述べられている菩提への学道をも含む菩提行の全行程を行おうとする、より高次の、菩提への心である。

しかし、ここで注目すべきは、この作品では菩提行が完全に達成されることまでは述べられていない点である。学道の最終段階である智慧の章は、次のような未来への希望の言葉で終わっている。

BCA 9. 168 kadopalambhadṛṣṭibhyo deśayiṣyāmi śūnyatām /
saṃvṛtyānupalambhena puṇyasambhāram

ādarāt //

わたしはいつ、認識 [をそのまま真理であると思ひ込む] 見解をもつ人々のために、世俗 [の言語表現] を用いて空性を、認識を否定する [空の立場] によって福德の資糧を、注意深く教えられるだろうか。

BCA が菩提行の未完成の段階で学道の叙述を終えていることは、作品全体の性格を示唆する重要な事実であるとともに、以下に論じる第10章の回向の主体の問題に結び付いている。

(4) 一人称

BCA という作品の性格を考えるうえで重要なことは、この作品の全編にわたって、一人称で述べられている文が頻繁に現れるという事実である。例えば、前半部に叙述されている一連の儀礼行為は、すべて一人称で表明されている。それに続く学道への決意表明も一人称で行われている。また後半部にも、「そのようにわたしは努力する (tathā yatnaṃ karomy aham)」(6. 69b), 「わたしは精神集中 (三昧) をなす (samādhānaṃ karomy aham)」(8. 186b) などといった、学道に関して一人称で決意を表明する文が要所要所に現れる。さらに表明文の中だけでなく、それ以外のところにも「わたし」という言葉がたびたび現れる。そして、最後の第10章の回向も一人称で行われている。

ただし、第10章の一人称については吟味が必要である¹¹⁾。ここで行われている回向が、誰による何の回向であるのかは、これまで検討されたことがなかった。この問題の解決は、回向の宣言を行い第10章の主題を述べている、章の冒頭偈をどう解釈するかにかかっている。

BCA 10. 1 bodhicaryāvatāraṃ me yad vicintayataḥ śubham /
tena sarve janāḥ santu bodhicaryāvibhūṣaṇāḥ //

菩提行に入ること (bodhicaryāvatāra-) を思念 (vi-cint) してい

るわたしの功德 (śubha-) によって, [わたしだけではなく, 同時に] すべての人々が菩提行を飾りとするものとなれ¹²⁾。

これまではこの偈は, 著者シャーンティデーヴァが, BCA という作品を著作したことによって生じた功德を回向しているのだと考えられてきた¹³⁾。しかし, この偈に始まる第10章全体は, 下記の 1.4 に始まる巻頭の菩提心の一節に対応している。

BCA 1.4 kṣaṇasāmpad iyaṃ sudurlabhā
 pratilabdhā puruṣārthasādhanī /
 yadī nātra vicintyate hitaṃ
 punar apy eṣa samāgamaḥ kutaḥ //

[人間として生まれるという] この非常に得がたい, 人間の目的 (解脱) を達成させる好機に恵まれる幸運が得られた。もしここで, ためになるもの (hita-) が思念 (vi-cint) されなければ, どうして再びこのように [幸運に] めぐり会うことが [あり得ようか]。

ここでいわれている「ためになるもの (hita-)」が何であるかは, そのあとの 1.7 で明らかにされる。

BCA 1.7ab kalpān analpān pravīcintayadbhir
 dṛṣṭaṃ munīndrair hitam etad eva /

少なからざる劫にわたって思念し続けている聖者の王たち (= 諸菩薩) によって, まさにこれ (直前の偈で述べられた菩提心) こそがためになるもの (hita-) であると見きわめられた。

つまり BCA は, 「ためになるもの (hita-), すなわち菩提心を思念 (vi-cint) しなければならない」という言葉で始まっているのである¹⁴⁾。

「菩提心を思念する」ということは、菩提を求める気持ちを心にもつ、すなわち菩提行を行おうと決意することである。10.1 でいわれている「菩提行に入ること (bodhicaryāvatāra-) を思念 (vi-cint) する」ことは、この 1.4 で提起された主題に他ならない。したがって、第10章で行われている回向は、まさに、1.4 以来の「菩提行に入ること」を思念している人物による、それによって生じた功德の回向なのである。

このように、第10章の回向の主体が第9章までの語り手と同じであるということは、この作品が第1章から第10章までの全体にわたって一貫してひとりの人物の「わたし」によって語られているということである。この事実は、この作品が全体をひとりの人間が朗読するのに適した形に作られていることを示している。朗読する「わたし」とは、全編にわたって菩提行に入ること」を思念している人物、すなわち菩提行に入ること」を決意した修行者である。

(5) BCAの性格

以上に論じてきたことをまとめると次のとおりである。(1) BCA は菩提行を述べている作品である。全体の構成は、発菩提心と学道への決意を述べる前半部、学道を述べる後半部、回向と結び、という三部からなっている。(2) BCA は、文中に具体的な儀礼行為を含んでいる。それは菩提心を起こす発菩提心の儀礼である。(3) BCA では菩提心には二種類あるとされる。その区別は作品の構成にも反映している。発菩提心だけにとどまればそれは第一の菩提心(「菩提を誓願する心」)であるが、菩提心を起こしたあと続いて学道を学ぶ決意をし、学道に入っていく修行者の菩提心は第二の「菩提に前進する心」である。しかしこの作品の学道の叙述は、菩提行が未完成の段階で終わっている。(4) BCA は、第10章の回向を含む全編を、一貫してひとりの人物が一人称で語る形式をとって

る。このことはこの作品が朗読に用いられた可能性を示している。朗読する人物は、菩提行に入ることを決意し菩提行を実践する修行者である。

以上のことを総合して考えれば、この作品の性格について次のような結論が得られる。すなわち、BCAは修行者が朗読することができるように作られている作品である。どんな修行者でも、この作品を朗読することによって、発菩提心の儀礼を行い、菩提行に入る決意を言葉を尽くして表明することができる。また、修行への意欲を自ら鼓舞することができる。このような性格は、この作品の結びの部分によく表れている。第10章は人々への回向を行っている章であるが、結末部分では「わたし」の願いを述べる文がまとまって現れる。そこでは、「文殊〔菩薩〕が行うような、その同じ〔菩提〕行がわたしに生じますように (yathā carati mañjuśriḥ saiva caryā bhaven mama)」(10.54cd) のように、自らの修行がうまくいくことを願う言葉が続けて述べられている。そして文殊と師匠 (kalyāṇa-mitra) とに帰依・礼拝を行ってこの作品は終わっている。この作品の朗読は、修行者の日々の修行の一環として行われたものとも、ある特定の儀礼において行われたものとも考えられる。後者であればその儀礼は、文中で発菩提心の儀礼が行われていることから、発心儀礼と考えることが可能である。あるいはさらに、後半部で菩薩の学道が述べられていることから、発菩提心と学道の受持とで、受戒の儀礼と考えることもできるかもしれない。

BCAは、宗教感情を切々と述べた宗教詩ではない。また、教理を解説する論書でもない。仏教の修行者が日々、あるいは特定の儀礼において、朗読するためのテキストという性格をもつ作品である。しかし、伝承の過程でBCAのこの性格は薄れていったものと思われる。現在の流布本は、より古い形を伝えていると考えられる敦煌写本にくらべて、第5章から第9章までが大幅に増広されている¹⁵⁾。特に第9章「智慧の完成」は増広が著し

く、ほぼ倍増している。第5章から第9章までは、前述したように菩薩の学道述べている部分である。したがって第1章から第4章や第10章よりも、教理的な題材を多く扱っている。この部分だけが特に増広されたということは、この作品が教理を説く書物の一つとして考えられるようになり、教理についてより詳しく書き加えられていったということを示唆する。それとともにこの作品の、朗読用のテキストとしての性格は失われていったのであろう。チベット大蔵経の中に、『入菩薩行所出誓願 (Bodhisattvacyāvatārodbhavapraṇidhāna)』 (Peking [150] 5929, Mo 300b^a-304a^a) として、BCA の第3章と第10章からの抜粋を誓願儀礼用の独立したテキストに編纂したものがあつた。この種のテキストが編まれたのも、BCA が本来もつていた、儀礼などにおいて朗読するものという性格が失われたために、それに代わるものがあつたからだと考えられる。

注

- 1) 敦煌出土チベット文書の中に、約700偈からなる BCA のチベット訳写本が存在することは Poussin 1962 に記されている。この敦煌本が BCA 本来の形より近いものであり、サンスクリット原典が現存しチベット訳・漢訳ももつ流布本は後世増広されたものであることが、齋藤明 1986 によって指摘されている。特に第5章の敦煌本との関係については、C. Ishida 1988 参照。
- 2) 金倉円照 1965, p. 239 参照。
- 3) 敦煌本では第2章と第3章が一つの章(章名「菩提心の撰受」)として数えられている。Poussin 1962, p. 196 参照。
- 4) 施波羅蜜についてはままとまった記述がない。ただし漢訳は第2章の題を「菩提心施供養品」とする。
- 5) 第10章に関しては、Prajñākaramati がこの章を注釈していないことなどから、Poussin (1907, pp. 143-144) が、後世の付加ではないかという疑問を提出した。しかし Vaidya (1960, pp. viii-ix) の論証や、チベット大蔵経に残っている BCAP 以外の BCA の諸注釈がみな第10章にも注釈していることから、BCA 本来のものとして考えてよいと思われる。

- 6) 例えば、静谷正雄 1974, pp. 133-135 によれば、最初期大乘仏典である『舎利弗悔過經』に、懺悔・隨喜・勸請を行うことが述べられているが、回向、發願はまだ含まれていないという。また、龍樹の Ratnāvali には、歸依、禮拜、隨喜、勸請、回向の行為が一続きに語られている (5. 66-85)。『華嚴經』入法界品の最後にある「普賢行願贊」(泉 p. 374 によれば、5 世紀までに成立) 第12偈に、これらの行為の名称がまとめて述べられている。vandanapūjanadeśanatāya modanadhyeṣaṇayācanatāya / yaca śubhaṃ mayi saṃcitu kiṃcid bodhayi nāmayami ahu sarvam// 「禮拜、供養、懺悔、隨喜、勸請、請仏住世の故に我によりて集められたる何らかの清淨を一切我れ菩提のために回向せむ」(泉訳 1929 p. 393)。また、Dharmasaṃgraha には「七種無上供養 (saptavidhānuttarapūjā)」として、禮拜、供養、懺悔、隨喜、勸請、發菩提心、回向があげられている。ただし、このテキストの India Office Library ms. では供養と回向を除き三歸依を加えた6つが、Cambridge ms. では供養と勸請と回向を除き三歸依を加えた5つが、Cambridge Fragment では發菩提心を除いた6つが、それぞれ「七種無上供養」としてあげられている。Cambridge ms. は「Bodhicaryāvatāra などの著作に記されている」(bodhicaryāvatārādīgramthe likhitam) として、BCA の偈の一部を引用している (禮拜 : BCA 2. 24ab, 懺悔 : 2. 64ab, 隨喜 : 3. 1ab, 發菩提心 : 3. 25a) (K. Kasawara, ed., *The Dharma-Saṃgraha*, 1972, p. 3, n. 5; Poussin 1904-14, p. 56, n. 1, 4; 白崎頭成 1990a, p. 52. ただし白崎 1990a は三歸依に BCA 2. 26 を対応させているが、これは BCA からの引用ではない)。さらに、12世紀半ばの成立とされる Sādhanaṃālā には「七種無上供養 (saptavidhānuttarapūjā)」という語を用いるサーダナ・テキストがいくつかある。しかし特に「七種無上供養」と記さずに、一連の行為を「懺悔など」「三歸依など」と呼ぶもののほうが多い。また行為の数も7に限らず、4から10までのあらゆる数の行為を述べるサーダナがある (清水乞 1978, pp. 65-69)。また、行為の具体的な内容を記さないが、Nāgārjuna (7世紀) の Bodhyāpattideśanāvṛtti に「七淨 (bdun dag pa)」、Jitāri の Nāthākṣobhyasādhana に「七の淨 (bdun po rnam par dag pa)」、Kṛṣṇa の Triskandhasādhana に「禮拜を始めとする7をなすべきである」という表現がある (白崎 1990a, pp. 44-49)。
- 7) それぞれの行為は次の箇所に述べられている。供養 : BCA 2. 1-23; 50, 禮拜 : 2. 24-25; 51-53, 歸依 : 2. 26; 48-49; 54, 懺悔 : 2. 27-47; 55-66, 隨喜 : 3. 1-3, 勸請 : 3. 4, 懇請 : 3. 5, 回向 : 3. 6-21.

- 8) 注6)参照。そのほか、藤田光寛 (1988, p. 876) によれば、チベット人 Bsod nams señ ge (15世紀) の儀礼書がこれらの行為に関して BCA に言及しているという。また Jitāri の Bodhicittotpādasamādānavidhi では BCA のこの箇所を偈を唱えることによってこれらの行為をなすとしている (白崎 1990b, pp. 82-84)。また BCA 2.64-66 (懺悔の部分) とほぼ同じ偈が、ネパールで10世紀以降に成立した仏教プラナーナ文献 Svayambhū-purāṇa に現れ (Poussin 1904-14, pp. 72-73), さらに、ネパールで現在も行われている供養法 Gurumaṇḍala-pūjā の中で祈禱文の一部として用いられている。Gurumaṇḍala-pūjā については、氏家昭夫 1973; I. Shima 1991 参照。
- 9) 心的供養については、Bühnemann 1988, pp. 88-93 参照。また同書は p. 7, n. 8 で BCA のこの箇所を心的供養として言及している。
- 10) BCA の二種の菩提心およびそれ以降の二種菩提心説の展開については、頼富本宏 1973 参照。
- 11) 以下は M. Kajihara in press の要約である。
- 12) チベット訳は cd 句を「すべての人々は菩提行に入りに来るように」とする。敦煌写本も同じ。
- 13) Poussin 1892, p. 103; 1907, p. 143; 金倉円照 1965, p. 211; Matics 1970, p. 284; Kelsang Gyatso 1989, p. 359; Sharma 1990, Vol. 2, p. 471f; n. 2.
- 14) 冒頭の三偈が流布本への増広の段階で付加されたことについては、Kajihara in press 参照。
- 15) 約200偈増えている。敦煌本の各章の偈数については、斎藤 1986, pp. 88-89 参照。

テキスト・略号と参考文献

[BCA] “Bodhicaryāvatāra” ed. I. P. Minayeff, *Zapiski Vostocinago otdileniya Imperatorskogo Russkago Arkseologiceskago obschestva*, IV (1889), pp. 153-228.

[BCAP] *Prajñākaramati’s Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Āntideva*. ed. de la Vallée Poussin, Calcutta, 1904-14.

[BCA チベット訳] Peking edition: No. 5272 (Vol. 99, pp. 243-262), sDe dge edition: No. 3871 (La 1d¹-40a⁷).

[BCA 敦煌本] Stein 628, 629, 630, Pelliot 729.

[BCA 漢訳] 『菩提行経』大正大藏経第32巻, pp. 543-562.

- Bendall, C., ed. 1902: *Śikshāsamuccaya. A Compendium of Buddhist Teaching*. rpt. Osnabrück, 1970.
- Bühnemann, G. 1988: *Pūjā—A study in Smārta Ritual*. Vienna.
- 江島恵教 1966: 「『入菩提行論』の註釈文献について」『印度学仏教学研究』第14巻第2号, 190-194.
- 藤田光寛 1988: 「チベットにおける菩薩戒の受容の一断面」『印度学仏教学研究』第36巻第2号, 878-871 (108-115).
- Gyatso, Geshe Kelsang. 1989: *Meaningful to Behold. A Commentary to Shantideva's Guide to the Bodhisattva's Way of Life*. 3rd ed. London.
- Ishida, Chikō. 1988: "Some New Remarks on the *Bodhicaryāvatāra* Chap. V." 『印度学仏教学研究』第37巻第1号, 479-476 (34-37).
- 泉芳環 1929: 「梵文普賢行願贊」『大谷学報』第10巻第2号, 370-426.
- Kajihara, Mieko. in press: "On the *Pariṇāmanā* Chapter of the *Bodhicaryāvatāra*." 『印度学仏教学研究』第40巻.
- 金倉円照 tr. 1965: 『悟りへの道』サーラ叢書第9巻, 平楽寺書店.
- Kasawara, K., Müller, M. & Wenzel, H. 1885: *The Dharmasamgraha. Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. I, Part V*. Oxford; rpt. Amsterdam, Oriental Press, 1972.
- Matics, M. L., tr. 1970: *Entering the Path of Enlightenment—The Bodhicaryāvatāra of the Buddhist poet Śāntideva*. London.
- Poussin, L. de la Vallée. 1892: "Bodhicaryāvatāra—Introduction à la pratique de la sainteté bouddhique (bodhi) par Śāntideva, Chapitres I II III IV et X, Texte et Traduction." *Muséon* XI, 68-82; 87-109.
- _____, tr. 1907: *Introduction à la pratique des futurs Bouddhas*. Paris.
- _____. 1962: *Catalogue of Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*. London.
- 斎藤明 1986: 「敦煌出土アクンチャマティ作『入菩提行論』とその周辺」『チベットの仏教と社会』, 春秋社, 79-109.
- Sharma, Parmananda. 1990: *Śāntideva's Bodhicaryāvatāra*. 2 vols. New Delhi.
- Shima, Iwao. 1991: *A Newar Buddhist Temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a Photographic Presentation of Gurumandalapūjā*. Monumenta Serindica No. 22, Tokyo.
- 清水乞 1978: 「インド宗教儀礼と造型——『サーダナ・マーラー』を中心と

して——」『日本仏教学会年報』第43号, 59-72.

白崎顯成 1990a: 「Jitāri の Bodhicittotpādasamādānavidhi 研究1」神戸女子大学紀要 vol. 23-1, 36-55.

———. 1990b: 「Jitāri の Bodhicittotpādasamādānavidhi 研究2」教育諸学研究論文集第4巻, 61-89.

静谷正雄 1974: 『初期大乘仏教の成立過程』 百華苑.

Steinkellner, E., tr. 1981: *Śāntideva—Eintritt in das Leben zur Erleuchtung*. Düsseldorf.

氏家昭夫 1973: 「ネパールの仏教儀礼の紹介 ‘Gurumaṇḍala-pūjā’ について」『密教文化』第105号, 96-72.

Vaidya, P. L., ed. 1960: *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*. Darbhanga.

頼富本宏 1973: 「菩提心覚え書」『密教学』第10号, 70-98.

(大学院後期課程学生)